

今回は、6月28日に弊館の小ホールで実施した数学を軸に人間とその心について追及している森田真生氏とフランスの哲学者フランソワ・ジュリアン氏による「普遍性と多様性の共存」と題する対話事業について報告します。

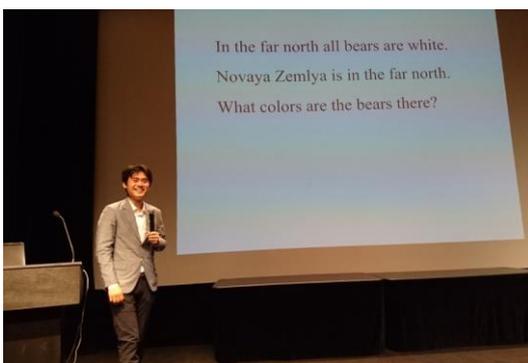
本事業は「アーティスト・イン・レジデンス」にならった「思想家イン・レジデンス」というシリーズ化を念頭に、弊館の日本研究・知的交流班が企画したものです。日本の知識人に対し、仮にフランスで発言する機会を与えられた場合、フランスのどの知識人と対談したいか?と問いかけ、その対話を実現させ、結果を小冊子にしてより多くの人たちに読んでもらうとともに、まだ海外に知られてない普遍的な価値を持つ日本の思想家の存在とその作品を知ってもらうことを狙いとしています。

「普遍性と多様性の共存」についての日仏対話

森田真生氏は各地のお寺やホールなど、国内外で「数学の演奏会」と題するライブ活動を実施し、音楽を聴くように数学を一般の人々の身近なものにしようと活動している独立研究者である。彼は2016年に『数学する身体』(2015)という著作で小林秀雄賞を受賞している。

一方のフランソワ・ジュリアン氏は世界的に著名な哲学者であり、中国やギリシャ思想の研究者としても名高い。『道徳を基礎づける』や『無味礼賛』『勢 効力の歴史-中国文化横断』などの著作は日本語にも訳されている。

森田氏は冒頭の講演の中で、数学は「普遍性」をめざして発達してきた学問であるが、実際は必ずしもそうではない。日本では西洋と異なった数学の発展を遂げてきた。その好例が道元や芭蕉の言葉を手掛かりとして数学の解法を紐解こうとした孤高の数学者・岡潔(1901-1978)の考え方だ。岡潔は数学の問題を考える際に、全体を一つとして見晴らす西洋的「知的理解」ではなく、人の悲しみをわかるように、「情」を通い合わせ、他者と暗黙の了解をして同化するという日本的な「もう一つのわかりかた」を追求した。森田氏はそうした「もうひとつの普遍的理解」の可能性についてジュリアン氏に提起した。



冒頭講演する森田真生氏



対話セッションでの森田氏(左から2人目)とフランソワ・ジュリアン氏(右端)

即ち、一時間ほどの講演の後、森田氏はジュリアン氏に対して以下の4つの質問を投げかけた。

- ① 森田氏が推奨している身体的技法に関連し、中国思想形成における身体の役割についてどう思うか? また言語で書き下すことができない「身体化された知性」を、どう議論によって理解さ

せることができるか？

- ② 科学と文学を対話させようとする森田氏の試み「数学の演奏会」活動についてどう考えるか？
「数学の演奏」とは「数学の翻訳」であると感じる。理系と文系の対話促進の契機になれば良いと思う。その対話を促進するため、他にどのような工夫が可能か、助言をいただけるか？
- ③ 人権の欠如は人権を普遍的に要求する運動を惹き起こす、とジュリアン氏は言うが、人権否定に対する抵抗の、強い普遍性の起源は何だと考えるか？
- ④ ジュリアン氏は『普遍的なもの、画一的なもの、共通のもの、そして文化間の対話について』（未邦訳）という著作の中で「もう一つ的人間的普遍性」について述べている、その普遍性を見出す何か糸口はないか？岡潔の「わかる」はこれに繋がるのではないか？

これらの質問に対し、ジュリアン氏は必ずしも直接答えなかったが、私なりに理解したところ、概ね次のように答えた。

- ① 文章だけでなく、それぞれの国で身に着けた身体的技法が必要なのは自分の日本での体験でも感じた。仏教の理解には身体的技法が不可欠であり、日本の中世を学ぶためには当時の茶道や禅などを体験する必要がある。私は、実際に（日本的に）座る動作をすることで日本語で「座る」ということをはじめて理解できた。
- ② 「数学の演奏会」のような試みが、文系の人の数学に対する恐怖感を軽減させるであろう。
- ③ 「普遍性」には二通りある。「普遍化しようとする」ものと「普遍化が可能である」ものである。「人権」は前者に属し、「道徳」の概念などは後者に属すであろう。

しかし、ジュリアン氏がアルゼンチン行きの飛行機に乗るため 20 時半に会場を後にしなければならなかったため、最初から予想されたこととはいえ、いずれの質問に対しても十分納得できる回答は得られず、禅問答のようになった感は否めなかった。

森田氏にしてみれば、「対話の入り口に立ったままで終わり」、自分の質問にほとんど答えてもらっていないという「もどかしい思い」が残ったと思うが、対話とは非常に難しい行為であることを改めて実感させられた催しであった。通訳を含めた十分な事前の打ち合わせの必要性も痛感させられた。

また、岡潔の考え方にない、「情」のように身体を通して「わかる」ということを「もう一つの普遍性」と考える森田氏も、実際には言葉を強力な道具として理論を形成していかざるを得ないという、ある種のジレンマを内包しているのではないかと感じられた。

なお、ジュリアン氏はこの対話を引き受けるにあたって、それぞれの母国語で話すことを第一の条件とした。対話 (dia-logue) とは隔たりのある二者がその溝を「横切って超える」ための行為である、というのがその理由であった。

そのようなこともあり、今回の事業は 2 人の対話者も 2 人の通訳も、聴衆も、皆が非常に緊張を強いられたが、他方で非常に知的好奇心を刺激された 2 時間半であった。会場へのアンケートでも『思想家イン・レジデンス』というアイディアは素晴らしいが、今回の講演会を通じて、相互理解が非常に難しいことを感じた」「このような挑戦的な日仏間の対話の機会は非常に面白かった。今回の参加者だけでなく日本の学界や日仏間交流にとっても大きな意味があるので、是非このような企画を続けてほしい」「素晴らしい、実り多い思想だった。ジュリアン氏のプレゼンが中断したので、来年続きをやってほしい」などの意見が寄せられた。

森田氏は、今回用意した原稿を「翻訳」していき、あらためてジュリアン氏に投げかけ、時間をかけて対話の継続を提案するつもりだという。